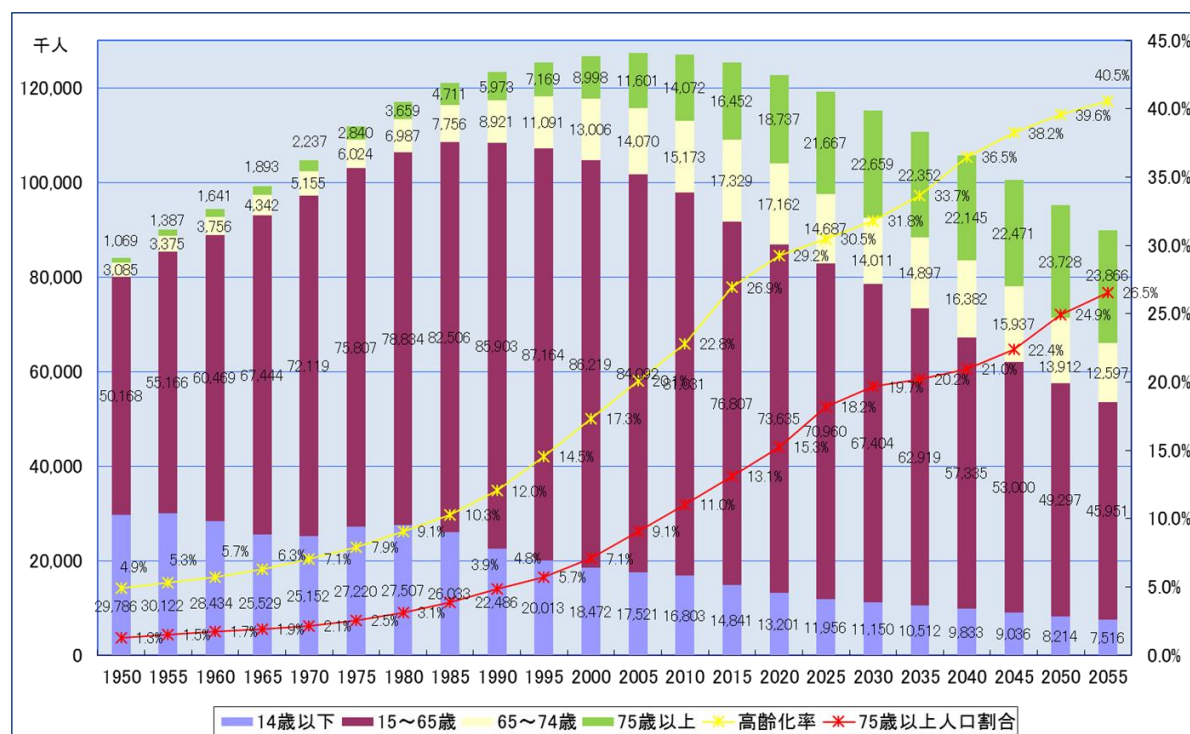


人口構造の変化と介護経営

1. 減っていく人口・増える高齢者人口

図1は1950年から2055年までの長期的な人口の推移と予測を示したものです。これによると、2005年から2010年をピークに総人口が減少を続けている一方で、65歳以上の高齢者人口の比重が高まっていくことが予測されています。特に2025年には「団塊の世代」が75歳以上に達することで、総人口に占める75歳以上人口の比率が18.2%まで高まることが予測され、いわゆる「2025年問題」として注目を集めています。

図1) 年齢階級別人口・高齢化率の進展と予測



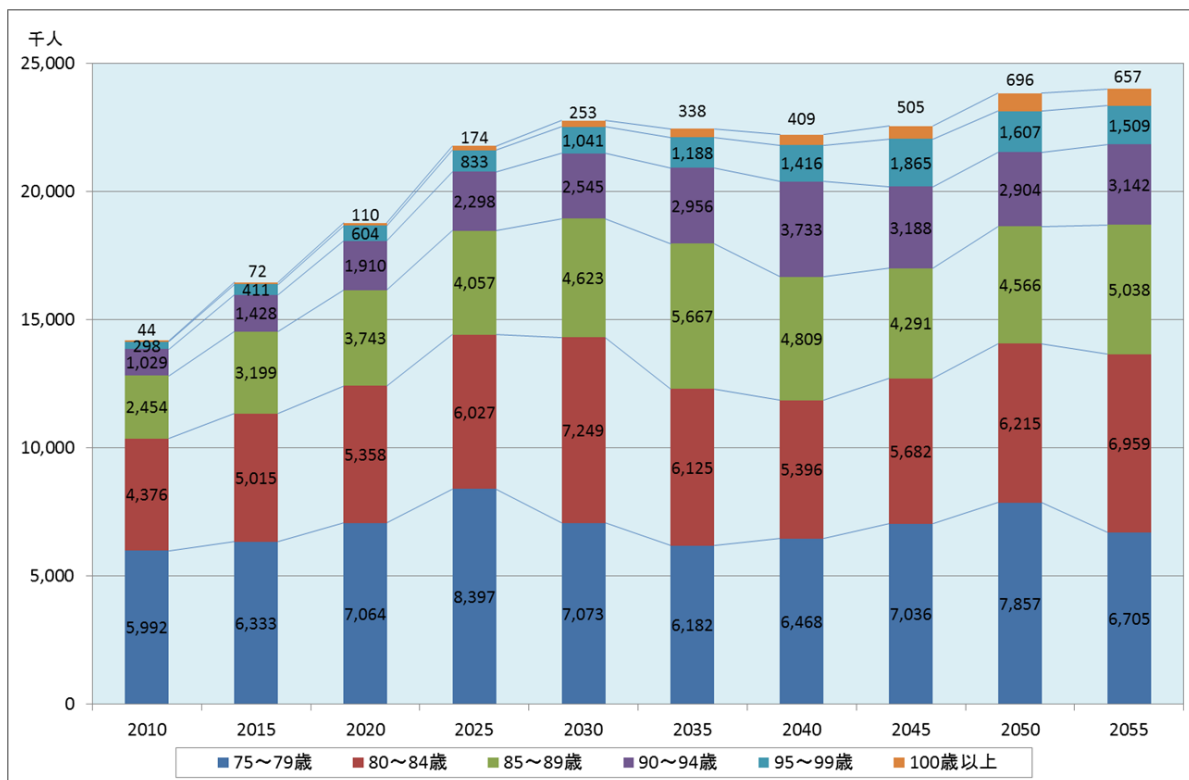
出所) 2010年までの実績は総務省『国勢調査』による。2015年以降の予測は国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来人口推計(中位推計)』による。

2. 2025年までに起こるより注目すべき変化

しかし、75歳以上人口についてより詳しくみると、より注目すべき変化が起きることが分かります。

図2は、75歳以上の人口推移の予測を5歳階級別に2055年まで見たものです。これによると、2025年に75～79歳の人口が急増することが分かります。いわゆる「2025年問題」です。その一方で、95～99歳、100歳以上という「超」高齢者の人口が、2025年に向かって急速に伸びていく傾向も確認できます。

図2) 年齢階級別75歳以上人口の予測



出所) 2010年実績は総務省『国勢調査』による。2015年以降の予測は国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来人口推計(中位推計)』による。

3. 「百寿者の時代」の到来？

「超」高齢者人口の伸びについて、より分かりやすくまとめたものが図 3 です。

これは 10 年単位で、年齢階級別の人数の伸び率を計算したのですが、2015 年から 2025 年の 10 年間に於いて、100 歳以上の伸び率は 2.4、95～99 歳の伸び率は 2.0 となっており、他の階級に比べて大幅に高い伸びを示していることが分かります。その後も 2045 年にかけて一貫して両階級の伸び率が他の階級を上回って推移していくことも予測されています。

もちろん、人数そのものは階級が若いほど多くなり、95 歳以上の人数の全体に占める割合は大きくはありません。しかし、介護施設・事業所の利用者に当てはめて考えてみると、95 歳以上の「超」高齢者は、介護サービスを必要とする可能性が他の年齢階級よりも高く、要介護度や家族状況等により優先的にサービスを受ける可能性も高いことから、今後、利用者のなかで「超」高齢者の占める比率が急速に高まることが想定できます。

介護施設・事業所の利用者に限定すれば、「百寿者の時代」が到来する、とも言えます。

図 3) 年齢階級別 75 歳以上人口の伸び率（10 年ごと）

単位：千人

	2015	2025		2035		2045		2055	
	人数	人数	伸び率	人数	伸び率	人数	伸び率	人数	伸び率
75～79歳	6,333	8,397	1.3	6,182	0.7	7,036	1.1	6,705	1.0
80～84歳	5,015	6,027	1.2	6,125	1.0	5,682	0.9	6,959	1.2
85～89歳	3,199	4,057	1.3	5,667	1.4	4,291	0.8	5,038	1.2
90～94歳	1,428	2,298	1.6	2,956	1.3	3,188	1.1	3,142	1.0
95～99歳	411	833	2.0	1,188	1.4	1,865	1.6	1,509	0.8
100歳以上	72	174	2.4	338	1.9	505	1.5	657	1.3

4. 広がる支援の可能性

95歳以上の利用者が急速に増えていくことは、サービス提供の場にどのような可能性をもたらすでしょうか？

95歳や100歳といった年齢の高い人々には「老年的超越」と呼ばれる、幸福を見出す感情が生まれると指摘されています。つまり、身体的にできないことが増えても、今できることに喜びを見出して幸福感を得ながら生活をしている人々が多くいるといわれています。2014年10月15日放送のNHKクローズアップ現代でも「“百寿者”知られざる世界～幸せな長生きのすすめ～」と題した特集が組まれるなど、注目を浴びています。

これまでの高齢者支援では、「健康であり、ある程度ゆとりのある暮らし向きを維持し、精神的にも自立している」という主観的幸福感に基づく自立のための支援、つまり、リハビリなどにより機能を回復させて自分できることを増やしていく支援が主でしたが、利用者としての百寿者の増加は、こうした自立支援に加えて、できなくても何かそれに代わる幸せを探す楽しみの支援、とでもいえる支援の新たな広がりをもたらす可能性を秘めているといえます。

近年の介護現場では、看取りや医療的ケアといった重度化対応に重きが置かれており、余暇活動やリハビリなどが以前のように活発に行われなくなっている状況が垣間見れます。このようななかで、身の回りに幸福を見出しつつ、日々の生活を楽しんでいる百寿利用者との交流は、介護職員にとって学びが多く、幸せを共有できる貴重な時間になると考えられます。まさに、これからの介護現場のあり方を豊かにしていくヒントが百寿者への支援の中に隠れていると思えてなりません。

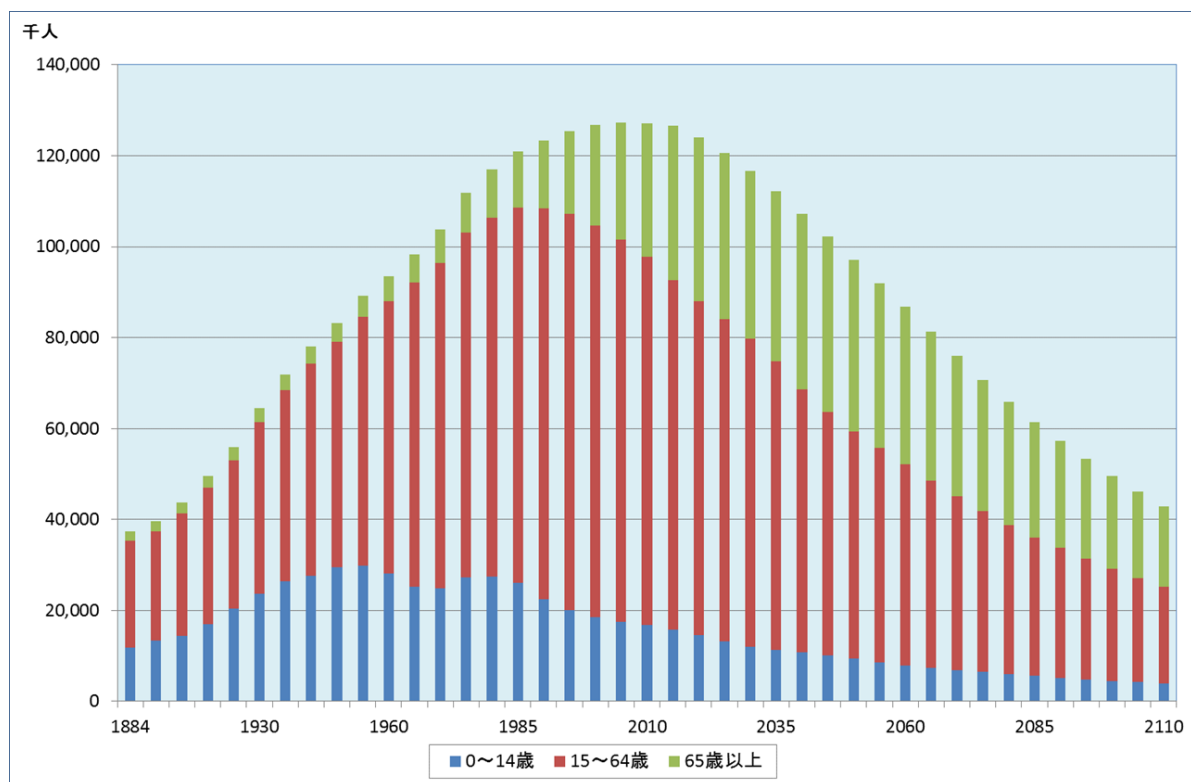
5. 世代内での支え合いに向けて

ライフリッチコンサルティング株式会社 セミナーレポート（2015-01）

最後に、超長期の人口推移と予測について見てみます。図4は1884（明治17）年から2110年までの約220年にわたる人口の推移と予測を示したものです。2010年あたりをピークに1884年以降120年以上かけて増加してきた人口が、今後100年をかけて当初と同じような水準まで減少していくことが予測されています。

問題は、今後100年の減少期間を通じて65歳以上の高齢者の割合が増え続けていくことにあります。これまでのように若年世代が高齢世代を支える世代間の仕組みだけでは高齢者支援が成り立たないことは明らかです。元気な高齢者の介護現場でのボランティアや、高齢者就労による介護職員の確保など、新たな「世代内で支える仕組み」を施設・事業所経営の場において創造していくことが求められているといえます。

図4）超長期の人口推移と予測



出所) 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来人口推計（中位推計）』による。